サバゲー!
著：相山タツヤ

ユキ

サバゲーマー女子。
元々は陰キャだったが、ストレス解消手段として
サバゲーを始めた事から他人と最低限のコミュニケ
ーションは取れるようになった。
しかし心の内には未だ多くのストレスを抱えてお
り、いつもそれを隠れて「発散」している。

職業：大学生
趣味：サバゲー
特技：股間への的確な狙撃

好きな食べ物：エグチ
嫌いな食べ物：野菜
好きなタイプ：なし
嫌いなタイプ：人間
好きな四字熟語：不労所得
嫌いな四字熟語：年功序列

イラスト：yagi 様

サバゲーで出会って、恋に発展。世には、そんなカップルが存在するらしい。
しかし、彼女いない歴イコール年齢の僕にとっては、ただの絵空事に過ぎない。『ただしイケメンに限る』。それが世の常だ。

「うう……最悪……最悪だっ……」

陰鬱な曇り空の下。僕はひとり銃を手に、先の見えない深い森の中を歩いていた。
不快な湿気で汗だくになった額をバンダナで拭い、僕は再び天を仰ぐ。

「こんなところ……来なきゃよかった……」

サバイバルゲーム。略して『サバゲー』。プラスチック製のBB弾を発射するエアガンで撃ち合うスポーツだ。
僕にとっては今回が初めてのサバゲー参加。エアガンショップでカスタムしてもらった

東京〇イ製ＳＯＰＭＯＤ　Ｍ４電動ガンを携え、装備もしっかり買い揃えて望んだ。
ところが、僕には決定的に足りないものがあった。それは【スキル】と【友達】だ。

よく下調べもせずに若気の至りで参加した今回のサバゲイベントは、特に上級者向けだと評判のハードなフィールドで開催されるものだった。
セフティエリアを出ればすぐそこに鬱蒼としたジャングルが待ち構えており、参加者たちは藪を掻き分けて道なき道を進んでいくことになる。しかも歪な高低差まであり、足元をよく確認して歩かなければ坂を転がり落ちてしまうことすら有り得る。そんなニワカお断りの過酷な環境が、コアなサバゲーマーから熱い支持を受け続けているそうだが、とにかく僕のような新人が来るべき場所ではないのは確かだった。正直、山を甘く見ていた。

そんな厳しい状況でも仲の良い友達と一緒なら楽しい思い出になっただろうが、僕は無謀にもソロでの参加だった。
誘う友達がそもそも居ないのだから仕方がないのだが、独り身での参加でも会場に行けばきっと意気投合できる新しい戦友が出来るだろうと楽観視していたのも悪かった。実際に来てみれば、僕以外は皆チームや友達同士で参加しており、そこにソロの僕が入り込む余

地はなかった。途中、何人かに気を遣われて一言二言くらいは話しかけられることがあったが、そこから話を膨らませるコミュニケーションスキルが皆無だったので、今もこのように完全ボッチ状態になっている。

「ここ、何処なんだよ……？　……もう、帰りたい」

今の僕は、サバゲに参加したことを本気で後悔していた。

これが僕の初サバゲー。もっと楽しい体験を期待していたのに、どうしてこんな独りぼっちで迷子になっているのか。惨めすぎて涙が出てくる。

このまま戦果もなく逃げ帰れば、本当に生き恥だ。どうせなら、せめて一人ぐらい敵を倒してやりたい。

「……それなら……」

僕は、ひとりの女子の事を考えた。試合開始前のセフティエリアで見かけた、レインコートを着たあの子だ。

男女混成の大学生と思しきグループの中に居た彼女は、周りの快活な雰囲気に馴染もうとせず、フードを被って黙々と自分の愛銃ＵＭＰサブマシンガンのチェックしていた。調子の良い男子が馴れ馴れしく話しかけても彼女は殆ど相手にせず、ひたすら自分の世界に没頭していた。
当然、その時の僕には声を掛けに行く勇気なんて無かったが、ただ何となく、彼女なら僕と波長が合いそうだと思った。本当に何となく、だが。

しかし、彼女が割り振られているのは敵チームだ。
会ったら最期、どちらかが倒れるまで戦わねばならない。叶わぬ恋だ。

「よし……」

枯れつつあった僕の闘志がようやく蘇ってきた。
彼女の為に大人しく倒されてやろうという軟弱な気持ちはない。どちらが倒れる事になろうとも、決着がつくまで全力で戦うのが兵士としての矜持だ。
とにかく戦いを通して、彼女に想いをぶつけてみよう。そうすれば、自分が変わる為の

何かが見つかるかもしれない。

僕はＳＯＰＭＯＤ　Ｍ４電動ガンを握り直し、生い茂る草木の中を突き進んでいく。

「けど……そもそもこんなひと気のない場所に居るわけないよなぁ……」

好戦的そうな彼女の事だから、こんな閑散とした場所ではなく、銃声が盛んに聞こえる激戦地に率先して走り込んでいくのではないか。そうなると僕のこんな臆病な動きではいつまで経っても会えるわけがないし、その前に他の敵に撃たれるのがオチだ。

またしても心細い気持ちになろうとしていた時、茂みの向こうに古い小屋がひっそりと佇んでいるのが見えた。今のところ人の気配は感じられないが、スナイパーが隠れるにはうってつけだろう。

僕は敵を警戒して息をひそめ、姿勢を低くしながら慎重に小屋に近づいていった。途中、銃のセフティが解除されているか不安で何度も確認する。大丈夫、いつでも撃てる。

神経を研ぎ澄ませ、どうにか小屋の側まで接近した所で、僕の耳が微かな声を捉えた。

「……ん……んんっ……」

女性の呻き声だ。僕は呼吸を抑え、鼓膜に意識を集中する。

「……ふっ……ん……はぁっ……。……くっ、んんっ……」

どこか苦しそうな息遣い。まさか、怪我人でもいるのだろうか。

僕の胸が高鳴っていく。困っている女性がいるなら、今こそ僕が男として株を上げるチャンスだが。

「……あっ、ううっ……んっ……はあ……」

壁越しに聞いていて、僕は何だか妙な心地になってきた。

有り得ないはずなのに、その女性の声が、どうにも艶めいて聞こえてしまうのだ。不謹

慎にも、僕の下半身に血が集まってきてしまう。

……馬鹿野郎！　冷静になれ。今そこで怪我人が苦しんでるのかもしれないのに……！

心の中で自分を叱責しつつ、僕は壁沿いにゆっくりと這って進み、古びた壁の穴から屋内を覗き込んだ。

……あっ！！

驚きで思わず声が出そうになり、すんでのところで堪えた。

「ん……くっ……んぅ……」

小屋の中に居たのは、あのレインコートの女の子だった。隅にうずくまるように座り、目を閉じて苦しげな息を吐き続けている。

体調が悪くてお腹を押さえているのかと思ったが、違った。ハーフフィンガーグローブ

を着けた彼女の細い右手は、彼女自身のスカートの中へと入り込んでいる。そして僕の見ている前で、彼女の右手が、もぞもぞと動いた。

「……んっ、ああっ……！　ふっ……んんっ……」

彼女は頬を赤らめながら、心地よさそうに身を捩った。スカートの中に潜り込ませた手を拙く動かして、身体をびくびくと震わせている。時折、切なげに左手の小指を噛んで、くぐもった呻きを上げた。

「ん、んんっ……どんどん、熱く、なっちゃうよぉ……は、ぁあっ、んっ……！」

惚けた表情になった彼女は、むっちりと肉のついた太ももをギュッと内股にして、スカートに潜る右手を圧迫した。そこからいっそう激しく右手を前後させて、スカートの奥に刺激を送り込んでいく。

すっかり自分の世界に浸りきった様子の彼女は、目を閉じたまま上を向いて喘ぎ、唇の端から涎をこぼした。

「ああっ……いいっ……いいよぉっ……」

そんなあられもない彼女の姿を目の当たりにした僕は、ついに確信する。

……こ、これって、完全にオナニーだろ……！　女の子でも、本当にするんだ……って感心してる場合じゃない！

混乱する僕の頭の中に、一斉に選択肢が現れた。

A、静かにこの場を立ち去る。B、エアガンで撃って頭を冷やしてやる。C、冷静に注意して止めさせる。D、脅してセフレにする。E、盗撮する。F、盗撮した上で脅して一生セフレにする。G、僕も彼女をオカズにオナニーする。

考えれば考えるほど思考が暴走して破廉恥な方向に転落していく。僕は童貞だ。こんな時の対処法など熟知しているはずもない。

「だめっ……だめなのにっ……気持ちよくてっ……さわるの、やめられないっ……んんっ……」

耳を澄ませると、彼女の指の動きに合わせてくちゅ……くちゅ……と粘っこい水音も聞こえ始めた。身体が高ぶって、秘部がさらに潤ってきているのだろう。

きっと今の彼女は、雄の野太い性器を体内に受け入れることを想像し、膣を自分の指で掻きまわしているに違いない。なんてこった。

……こんなの、我慢できるわけ、ないだろ……！

僕のズボンの下で、ギンギンに高揚したペニスが鋭いテントを張っている。下腹部に熱がみるみるうちに溜まってきて、膝が震え、まともに立っていられなくなってきてしまった。

よろめいた弾みで壁に手を強くついてしまい、同時にミシッと軋む音が響いてしまう。

「――――誰！？」

彼女の動きは驚くほど速かった。
壁に立てかけていた銃を素早く手に取った彼女は、壁の穴に向けてフルオートで発砲した。

「「痛ぁあああ！！」」

間もなく、雨が降り始めた。
何処に行くことも出来ず、僕と彼女は気まずい調子で肩を並べて小屋の中に座っていた。

「……しばらく待っていれば、止むと思う。通り雨のはずだから」

彼女がトーンの低い声で言った。とにかく気まずい沈黙を避けたくて、僕は愛想笑いをする。

「そ、そうなの？　よ……よかったよ……。天気予報、見てなかったから」

結局、自慰行為を見られた彼女の乱射によって僕は撃たれ、彼女もまた自分の跳弾がヒットして惨めな両成敗となった。初めての一戦が、これほど不名誉な戦いになるとは思いもしない。

しばらく黙り込んでいると、ぽつりと彼女が言った。

「……見た、よね？」

彼女の、少し暗い陰があるが可愛らしい瞳が僕を見つめた。

「な……何を？」

「……ナニ、を」

ジトッとした眼差しで睨んでくる。

「い、や、あ、えっと……み、見てない……と、思う」

「嘘つき。どうして嘘付くの……？」

ずいっと怪訝そうな顔を近づけてきた。僕はドキリとする。

鼻でゆっくり呼吸をすると、女子らしい甘い香りではなく、汗っぽい生々しい体臭が漂ってくる。思えば、レインコートを羽織って戦い、さっきも一心不乱に『自家発電』していたのだから、彼女が汗臭いのも当然のことだ。

嗅いでいて良い匂いではないはずだが、何故だか今は妙に下腹部がじわりと刺激される。

「えっと、だ、だって……そういうのって、普通、女の子は見られたくないものでしょ？」

「当たり前だよ。見られたいわけない。でも、キミは見たんだよね。ずっと覗き見してたん

だよね？」

「あ、いや……！　ず、ずっと、ではないと思うけど……」

「嘘つき。ちょっと見ただけで、キミの股間があんなに勃起するわけないよね。すっごくズボン膨らませてたよね」

「……う、うう……ごめん、なさい……」

僕は観念して肩を竦め、深く頭を下げた。

自分のした事を冷静に考えてみれば、これは警察のお世話になる案件だ。人生初のサバゲでボッチ負けした挙句、逮捕初体験なんて最悪が過ぎる。

ひたすら頭を下げ続けていると、彼女は深い溜め息を付いてヤケクソ気味に語り始めた。

「……私だって、迂闊だったよ。本当にバレちゃう前に、こんな変態行為は止めてれば良

かったんだから。私のこと、痴女とか変態とか思ってるでしょ？　そうだよ……私は異常者だよ。人を撃つと、快感が止まらなくなっちゃうんだ」

彼女は思い詰めた顔つきで自分の肩を抱きながら、自嘲の笑みを落とす。

「サバゲで敵を倒した後は、いっつもトイレでオナニーしてたんだけど……だんだん、ゲーム中でもシたくなっちゃう時があって……一回始めたら、クセになっちゃったの。バレたら大変だっていうのに、身体が言うこと聞かなくて……ほんと、馬鹿だよね、私ったら……」

両手で自分の髪の毛をくしゃっとしばらく握ってから、不意に力が抜けたように手を放す。

「ごめんね……汚いモノ見せちゃって。私……いわゆる陰キャなの。高校までカースト最底辺でずっとパシリだった。そのストレス発散の為にエアガンでクラスメイトの写真を撃ったりいっぱいオナニーするのが癖になってて……。大学生になって、もっと威力の高いエアガンを持てるようになったから、サバゲーを始めてみたら……すごく夢中になっちゃっ

た。本物の人間を撃つのは楽しくて。初めて勝った日の夜なんて、朝までずっとオナニーしちゃうくらい。もう、人間として終わってるよね、私……」

彼女は虚ろな瞳を見開きながら、また大きな溜め息を付いた。自傷行為めいたヤケクソな告白をして、かえってひどく塞ぎ込んでいるように見える。

話を聞き終えた僕は、慎重に言葉を紡いだ。

「……いや、そんなもんだよ、人間なんて。誰でもみんな、狂った欲望を持ちながら、それを必死に隠して生きてるだけだ。君だけじゃない。僕だって同じだ」

僕自身も、彼女に説教が出来るほど清廉潔白な生き方はしてこなかった。異性にモテたいという気持ちを拗らせすぎて、実際に手を出した事こそ無いものの、人には絶対に言えないような穢れた妄想を沢山してきたものだ。エアガンより汚い欲望を発射してきた分、むしろ僕の方が不健全と言ってもいい。

「僕だって……君が一人でシてるのを見た時……僕もオナニーしたいとか、もっと変態なこ

ととか、たくさん考えたんだよ。僕だってタガが外れたら、君と同じような存在だと思う。人に言えなくて我慢している事を、山ほど溜め込んでる」

いつも喋ればどもってしまう僕だが、今だけは舌がやけに回った。彼女の内心を知って、理解が深まったからなのか。それとも、自分と同じような境遇の人間を見つけられたという憐憫の気持ちによるものか。

「……私のせいで……キミも壊れちゃったの……？」

僕を見つめた彼女の瞳が、妖しい光を孕んだ。何だか、とても楽しげだ。

「僕が、壊れたって……？」

「そうだよ。出会ったばかりで名前も知らない女の子に、そんなこと打ち明けるなんて。もし私じゃなかったら即ツーホーされてるよ……？　男の変態さんには人権なんて無いんだから、我慢しなきゃいけないのにね。私が、壊しちゃった」

彼女は「あはは」と軽く笑って、さらに僕をじいっと見つめた。

「ねぇ……私が、責任、とってあげようか……？　キミを壊しちゃった、責任……」

彼女が冷えた笑みを浮かべながら、肩を寄せてきた。

僕の心臓がバクバクと高鳴る。からかわれているに違いないが、童貞にはあまりにも毒だ。こんなに近づかれたら、否応なしに彼女を好きになってしまう。

外の雨は、次第に激しさを増すばかり。これでは、しばらく小屋から出られそうにない。

「……それって、どういう……」

そこで彼女が急に顔を近づけてきて、僕の頬をちろっと舐めた。

僕はハッとして、彼女の顔を見つめ返した。迷い猫のような、愛らしく寂しげな彼女の顔立ち。

「ユキって、呼んで。……私の、名前……」

彼女――ユキの右手が、僕の肩を優しくさすった。

僕の下腹部に溜まった熱が勢いづいてきて、冷静ではいられなくなってくる。思考が瞬く間に蕩けていくような感覚。

ユキの右手が、僕の手をぎゅっと掴んだ。僕も、その細い指を静かに握り返す。

「……んっ……」

そこからは、成り行きだった。

僕とユキは互いの唇を重ね合わせる。汗と唾液で湿った柔らかい唇を、隙間なく押しつけ合った。

「……ん……ちゅっ……」

ユキがわざと音を立てて僕の唇を吸い、さらに口を重ねてきた。
まるで愛撫し合うかの如く、握り合わせた指を強く揉み動かしながら、僕たちは濃厚な接吻に溺れていく。

これが、キス。想像していたよりも、ずっと生々しい。
ロマンチックな甘く優しい吐息なんてものは感じない。ただひたすらに、汗の匂いが混じる温い肌を激しく押しつけ合う感触。唇を通して、ユキの欲望がさらに高まっていくのが鮮明に感じ取れるようで、僕も昂りを抑えきれなくなる。僕たちはキスを通じて、性欲をぶつけ合っている。

「はぁっ……んっ……ちゅ……」

唇を懸命に擦り合わせていると、彼女の舌がぬるりと這い出てきて、僕の口内に入り込んできた。そのまま僕も舌を差し出して、それを受け止めていく。ざらざらとした舌粘膜に、互いの粘った唾液が混ぜ合わさっていった。

僕は辛抱堪らず、ユキの身体を強く抱きしめた。同時に彼女の豊満な胸の感触が、僕の身体の上でぎゅう……と柔らかくつぶれた。
彼女はそれを嫌がるどころかむしろ僕の身体をしっかり抱きしめ返し、自分の身体をもっと隙間なく密着させてきた。僕の身体を押し倒さんばかりに強く抱きついてきて、さらに深く深く舌を僕の口内に絡め入れてくる。

「ん……ちゅ、ぱっ……ああっ……」

彼女の唾液で僕の口内がどろどろにされた所で、ようやく唇が離された。
粘った透明な雫が僕たちの唇の間を伝い、垂れ落ちていく。

「ユキっ……はぁ……キス、すごすぎるよ……」

「ほんとだね……カップルってみんな、こんなえっちなこと、してたんだね……。もっと、キスしよっ……」

続きは本編で！